

## これからの学びに関する提言

新型コロナウイルス感染症は COVID-19 であるわけで、COVID-20 ではない。名前を付けるというのはなかなか重要なことで、今にして思えば、スペイン風邪というのもスペインにとっては迷惑な話だったことだろう。通信教育というのもその名称がなかなか思考を混乱させる。

学校教育法では、いわゆる一条校における通信教育を次のように表現している。

- ・高等学校（中等教育学校の後期課程を含む。）の通常の課程（以下「全日制の課程」という。）、夜間その他特別の時間又は時期において授業を行う課程（以下「定時制の課程」という。）及び通信による教育を行う課程（以下「通信制の課程」という。）（第四条から）
- ・大学は、通信による教育を行うことができる。（第八十四条）
- ・大学には、夜間において授業を行う学部又は通信による教育を行う学部を置くことができる。（第八十六条）
- ・大学院を置く大学には、夜間において授業を行う研究科又は通信による教育を行う研究科を置くことができる。（第百一条）

### では、学校における「通信教育」とは

通信の課程とは、通常の全日制の課程ではなく夜間に授業を行う課程でもない、通信による教育を行う課程という位置になる。高校で言うと授業を行う時間によって、全日制か定時制かを区分する。通信による教育とは、時間ではなく空間の違いを表現している。それでは、同じ時間に異なる空間で授業を行うのはなんと呼称しようか。コロナ禍のなか、あらゆる学校種で遠隔授業が展開された。これは、通信教育ではない。一般に「遠隔授業」と呼称されている。思えば、高校通信教育でも面接指導は必須であるし、大学通信教育でも面接授業は原則必須である。制度的流れからすると、この面接指導・授業というものに関してメディア技術の発展に応じて、通常の課程と通信の課程にまたがる授業方法が進展してきた。これがいわゆる遠隔授業である。同じ空間にいなくとも授業は成立するではないかということだ。もう少し進むと工夫次第で同じ時間でなくとも成立するではないかということになる。当然のことながら、通常の課程と通信による教育の課程の境界は限りなく溶け込んでいく。となると、通常の課程と通信による教育を行う課程の明らかな違いは高校でいえば「添削指導」、大学でいえば「印刷教材等による授業」があるかなしかということになる。しかしながら、今回の新型コロナ禍対応でこの境界も怪しくなっている。いよいよ、設置基準で示されている校舎やキャンパスを持つことの意味合いは薄れていく。では、学校における「通信教育」とはどう定義されていくのであろうか。

### では「教育」とは

制度上の設計では、通信教育であっても、通常の課程（いわゆる全日、通学）であっても、教育内容の質は変わるものではない。通信教育が異なるものとして、学び方の特徴として自学自習があげられることもある。しかしながら、主体的な学びとはまさに自学自習と大きく重なるものでもある。また、いつでも、どこでも、誰でも学ぶことができるということも通信教育では同様によく謳われる。だがこれも先ほど見てきたように、その境界は曖昧になる傾向にある。

自学自習をすることに価値はあるが、自学自習を強いることそのものに大した意味はない。近代の国家のための人材養成のシステムが、学びを勉めて強いる学校という構造になっている。社会や国家を維持するための社会化が教育の意味であることも事実であろう。

はてその中で「通信教育」とはどのような意味を持つのであろうか。

## では、「学び」とは

本来学びとは誰にでも開かれているべきである。教育と学習はその主体が、教え手なのか学び手なのかという区分が一番わかりやすいものだが、それでいくと学習とは学習者が主体の行為となる。社会化は集団が個に対して行う行為であるが、学習は個が自らを社会で活かしていくための自己実現を含んだ創造的な行為であろう。その学びと通信教育はどのような関係になるのか。

「学び (Learning)」とは、1996年ユネスコ「21世紀教育国際委員会」のいわゆるドローール報告では以下の様にまとめられている。そしてこれは生涯学習 (Lifelong learning) の理念として広く知られている。

### 学習の4本柱 (the Four Pillars of Learning)

- (1) 知ることを学ぶ (Learning to know)
- (2) 為すことを学ぶ (Learning to do)
- (3) (他者と) 共に生きることを学ぶ (Learning to live together, Learning to live with others)
- (4) 人間として生きることを学ぶ (Learning to be)

どうやらこの辺りが、通信教育と社会との関わりになりそうだ。

## これからの学びとは

初等中等教育は社会化を目指し、高等教育は新たな社会を創るためのものという二元論は短絡的すぎる。たしかに、その重点は初等中等教育が社会化を中心となし、高等教育では専門性を深めるというのはわかりやすい区分であるが、その内容は発達によって異なるであろうし、個別に異なるのが当然のことだ。要はいい塩梅が肝要なのであろう。遠隔授業と対面授業も同様であろう。通信の課程と、通常の課程 (全日・通学) の関係も推して知るべしだ。

学びたい時に、学びたいことをそれぞれのライフスタイルに合わせて学ぶことができる社会。そこには、通信の課程と、通常の課程 (全日・通学) などという区分は存在しない。人の一生において、学ばなければならないものがある。また、学ぶことで実現することもある。学びは未来を創っていくエンジンだ。まさに Learning to be。

どこで学ばかでなく、何を学ばかということが重要だ。学びたいときが学びの適齢期だということが当たり前前の社会が確実に近づいている。通信教育としての独立した設置基準を持たない大学院<sup>\*</sup>は、令和2年6月より、他大学院の単位互換及び入学前の既修得単位の認定の柔軟化が図られ、今まで修了要件30単位中の既修得単位の上限が10単位であったものが15単位となった。これからますます、通学だ通信だ、対面だ遠隔だ、A校だB校だなどという二元論をすべてのものが越えていくという実に自然な流れになる。

※通信制高校には、高等学校設置基準に対応した高等学校通信教育規程、通信制大学には大学設置基準に対応した大学通信教育設置基準があるが、大学院は大学院設置基準や専門職大学院設置基準のもとで通信教育が展開されている。

## 未来予測

「学校の勉強なんか何にも覚えていないよ。」

「イヤー勉強嫌いだったな。今でもそうだけど。」

「勉強が好きな奴なんていないんだから、嫌でもやらなければならないんだよ。お父さんもそうだった。」

このような、よく大人が何気なく自慢げにいうセリフは聞かれなくなります。

何故聞かれなくなるかというと、いわゆる大人が、学ぶことの楽しさや喜びを十分感じてきているからです。お金を払っても学びたいと思い、学びたいと思った時には街のあらゆるところに学ぶためのリソースがあり、共に学んでいく仲間たちがいるのです。

新たな技能(例えば楽器、例えば外国語)を身につけたいと思えば、街の中に教えてくれる人もいれば、共に学ぶ仲間もいる。新たな知識を身につけ世界について考えていきたいと思えば、街の中に教えてくれる人もいれば、グーグルがありとあらゆる情報を整理して示してもくれる。そして、多くの仲間が互いに議論し新たな社会を創っていく。大学でちょっと学んでくるかと言って三か月ほど休職してみる。

これが、私のイメージする未来のおとなの生活です。

そして、未来の社会には学校があります。小中学校だけでなく、もちろん高校もあります。高校は多様な学びを支える「場」となります。週一日通う生徒もいれば、毎日通う生徒もいます。そして、みんな何らかの社会参加をしています。働いて経済的に自立する生徒もいれば、世界中を飛び回りボランティアに参加している生徒もいます。何しろ、高校は社会に常に開かれた場となっています。中には悪さをして警察の厄介になる生徒もいます。それを貴重な体験として高校の生活発表会で反省を述べる生徒もいます。

大学は学生が中心が社会人になっています。高校を卒業してすぐに大学に進学する者は少数派です。高校在学中に貯めたお金で日本中をさすらっている者もいれば、海外に行くものもいる。高校時代の延長で何らかの仕事に就く者がごく一般的になる。

いまや、学ぶのなんて辛いから嫌だという大人はまれにしかいません。

『通信制高校のすべて』(2017)より

となると日本通信教育学会はどうなるのか。このようなコロナ禍という社会状況だからこそ、通信教育について知るべきであるし、知らせるべきでもある。社会の進展とともに学会としての役割を果たし終えるのも重要だと考えるが、その前に、もっと多くの方に通信教育について考えてほしいと思う。学会でお待ちしています。

松本 幸広(星槎グループ)